《史料紹介》松本荘一郎「亜行日記」

翻刻・解説　瀬戸口　龍一
（大学史資料課）

はじめに

幕末から明治初年にかけて、西洋の文明、知識などを求めて数多くの日本人が海外に留学したことはよく知られている。彼らが異国で体験した様々な出来事を書いた日記や手記は数多く存在し、現在それらをまとめて見ることができる代表的なものとして『明治欧米見聞録集成』[1]を挙げることができる。

その「序」によると「日本の欧米研究は幕末から進められており、それは幕府・藩、さらに明治政府による積極的な政策に発展した。なかでも、外国語研究、翻訳から留学、巡回へとの進展は、それらの報告・記録等を数多く収めるに至った」とあり、特に幕末以降の欧米研究の隆盛が、このように多くの報告書や記録類を書き残すようになった要因の一つとしている。そしてこの時期、欧米を訪れた日本人が、政治や経済だけでなく文化や慣習などを含めて、ありとあらゆる西洋の事物を吸収しようとしていたことをこれらの見聞録から読み取ることができると述べている。

確かに彼らの日記などを見ると、その日に起きた、または目にした非常に細かいことまで書き記していることがわかる。今回紹介する「亜行日記」も、その書名からわかるように、アメリカに留学した一青年が明治期に書き綴った日記である。

この日記を取り上げた理由については後述するが、専修大学創立者の一人である目賀田種太郎が登場するためである。ここでは、作者である松本荘一郎、そして彼が書いた「亜行日記」の書誌的情報、最後に松本荘一郎と目賀田種太郎について簡単な解説を付すこととしたい。

1．「松本荘一郎」について

まず、作者である松本荘一郎について紹介する。彼の生涯については『朝日日本歴史人物事典』[2]『国史大辞典』[3]などによって簡易的には知ることができるが、さらに詳しく書かれているものとしては、彼のいとこにあたる端（ただし）が書き残した「松本荘一郎氏伝記一班」[4]と題した伝記が残されている。ただし、これはアメリカ留学までの青年期までの記述であるため、その生涯すべてを知ることはできな

い。そのほか平成二一年、岐阜県大垣市が市制九〇周年記念事業の一環として開催した「大垣ルネサンス先賢展」において、地元に関係する郷土の偉人三一人を取り上げ顕彰したが、そのなかの一人に松本荘一郎がいる。実は今回紹介する「亜行日記」の存在を知ったのはこの展示のおかげであるが、その記念誌『先賢展本』に、「わが国最初の工学博士で日本鉄道界のリーダー」と題して、その生涯や功績がくわしく紹介されている。現在のところ、荘一郎の生涯を知るうえでは最もよくまとまっているものといえる。ここではそれらを参考にして、彼の生涯を述べていくこととする。

明治期の鉄道技術者としてその名を知られる松本荘一郎は、嘉永元年（一八四八）五月二三日、播磨国神崎郡粟賀村（現・兵庫県神崎郡神崎町）にて、松本隆平（後に文斎と号す）の長男として生まれた。幼年期より祖父・玄機に漢学を学び、蘭学を学び始めたのは慶応三年（一八六七）、頃のことである。明治元年（一八六八）には神戸で洋学塾を開いていた箕作麟祥の門下となり、頭角を現すも、翌明治二年、経済的な理由から帰郷することとなった。この時、荘一郎の才能を惜しみ、救いの手をさしのべたのが、同じ箕作の塾で学んでいた大垣藩士・上田肇と尾崎洲五であった。「松本荘一郎氏伝記一班」にはこの時のことを次のように記している。

同年（明治二年）何月カ、同塾（箕作麟祥の塾）生、大垣藩・上田肇、尾崎洲五、荘兄ヲ慫慂シテ大垣藩ニ入ラシム、亡父俊平則チ荘兄ヲ養子トシテ大垣藩公用人・桐山辰次郎氏（後石川県令）ト商議シ、同藩准士族トシテ学費ヲ給シ、東京ニ留学セシム（カッコ内は筆者）

このように荘一郎は彼らの推薦を受け、大垣藩士族となり、大垣藩校に入学、その後大学南校（現・東京大学）に進学する。しかし同年九月に大垣藩が学校を興すと大垣藩立学校洋学寮の「社長心得」として帰藩するも、翌年三月には再び大学南校に復学した。

明治初年、政府は近代化を推し進めるために必要な知識を海外から導入するため、積極的に海外留学を奨励していたが、明治三年（一八七〇）八月、大学南校はその一環として生徒を選抜、目賀田種太郎（静岡藩士）、香月経五郎（佐賀藩士）、長谷川雉郎（姫路藩士）、松本荘一郎（大垣藩士）の四人を国費による留学生として派遣することとなった。荘一郎と専修大学創立者の一人・目賀田との出会いはこの時に始まり、彼らの付き合いは荘一郎が亡くなるまで続いた。ちなみにこの時選ばれた四人は文部省による初の国費留学生となった。

彼らは当初、イギリスに留学する予定であったが、新興国であるアメリカで学ぶほうが日本のためになると自らで判断し、留学先をアメリカに切り替えた。

アメリカに着いた荘一郎は、ニューヨークにも近いトロイ市の中等学校に入学し、目賀田や長谷川らとともに英語・数学を学んだ後、

工科大学としてはアメリカで最も古い歴史をもつレンセラー大学（ニューヨーク州トロイ市）に入学した。そこで土木工学を修め、明治九年（一八七六）に帰国。東京府御用掛に任命されるとともに、この時期誕生したばかりの東京大学でも講義を行った。

そして明治一一年（一八七八）には開拓使御用掛に転じ、北海道に出向く。ここから荘一郎の鉄道人生が始まるといって良いだろう。煤田（すすた）開採事務副長、工部権大技長となり、この間、開拓使雇米人クロフォードとともに東京―青森間鉄道の線路調査に従事した。

その後は工部省・農商務省・北海道庁などの要職を歴任し、炭礦（たんこう）や鉄道の建設および経営に尽力し、明治二三年（一八九〇）九月鉄道庁第二部長、同二六年（一八九三）三月鉄道庁長官を経て、同年一一月逓信省鉄道局長となり、鉄道敷設法制定後の鉄道建設・改良に力を発揮した。

明治三〇年（一八九七）一二月の鉄道作業局長官就任後は、官設鉄道の経営にあたっていたが、在職中の明治三六年（一九〇三）三月一九日、五六歳という若さで死去した。墓は目賀田種太郎と同じ東京都都大田区池上の本門寺にある。

現存する荘一郎に関する資料としては、ご子孫から譲り受け大垣市立図書館が所蔵する「松本荘一郎家資料」（仮）、そして明治三一年（一八九八）、荘一郎が発起人となって、設立された帝国鉄道協会、現在の日本交通協会が所蔵する「松本文庫」などがある。

法学者で幣原内閣の国務大臣を務めた松本蒸治はその長男、哲学者の松本正夫はその孫にあたる。

このように荘一郎は明治期の日本における鉄道の敷設に力を尽くした人物であるが、彼の功績はそれだけでなく、多くの後進の人物を育てたことにもある。南満州鉄道の社長を務めた野村龍太郎、養老鉄道の創始者・立川勇次郎、橋梁工事の第一人者であった那波光雄などを育てたのが荘一郎であった。

2．「亜行日記」について

次に「亜行日記」の書誌情報および簡単な内容について述べていく。「亜行日記」は松本荘一郎がアメリカに留学するために船に乗り込む前の明治三年九月二七日から、アメリカ上陸後、トロイに着いた同年閏一〇月一五日までの日記である。

内容については、日々に起きた、または感じた非常に細かい点までを書き記しており、当時の海外渡航者の日記と同様に、様々なものに興味をもっていることがわかる。後に鉄道事業に従事する人物らしく、サンフランシスコからニューヨークまでに乗車した鉄道の感想も書かれている。そこにはその速度や快適さに感動する荘一郎の気持ちが端的に描か

「亜行日記」表紙
大垣市立図書館所蔵

れている。ちなみに荘一郎は後年、日本において食堂車や寝台車を初めて導入するが、この時の経験が元になっていたのかも知れない。

もう一点、この日記で目を見張るのは、荘一郎の漢文能力である。至るところに漢語表現を見ることができる。特に風景描写にはほとんど漢文を用いている。これは「松本荘一郎氏伝記一班」にあるように荘一郎が、幼少から漢文や書も親しんでおり、頼山陽や池大雅の書を写し取っていた経験があったからこそといえるだろう。この時期に留学生として選ばれた多くの人間が、目賀田も含めて非常に高い漢学の素養をもっていたことは注目すべきことである。後に彼らが日本に持ち帰った知識や専門用語を日本語に翻訳できたのは、このような漢文能力があったからこそといえる。

書肆情報について触れると、大垣市立図書館が所蔵する「松本荘一郎家資料」（仮）のなかには三種類の「亜行日記」が存在する。一冊は表紙の付いた正本、残り二冊は副本と思われる。正本は縦二四．二センチ×横一七．五センチ、和装で二五丁から成っている。今回の史料紹介ではこの正本を底本とした。副本は罫紙を紙縒りで綴じたものと、罫線なしの紙を紙縒りで綴じたものがある。前者は縦二四．一センチ×一六．一センチ、二九丁から成り、後者は縦二八．二センチ×横二〇センチ、二五丁から成っている。ただし正副本三冊ともに同一人物の手によるものではなく、それぞれ別人の手による筆写本と思われる。

この「亜行日記」正副本三冊には明治四三年（一九一〇）三月一六日に松本端が荘一郎の子息である蒸治にあてた次のような書簡[6]が添えられていた。全文を紹介する。

逐日、桃花も暖之処、御当家御揃益御清安奉賀候、先達而ハ、親父著亜行日記原稿貴家ニ無之旨御答ニ付、乍延引写取事奉候、老眼視力之弱、加て先年より手指麻痺拙筆不如意ニ付文字不成、任誤字脱字等甚杜撰之至御用捨有之度候、乍憚御母公始め皆々様へ宜敷御鶴声可被成下候、先ハ是迄得貴意度如此候也

三月十六日　　松本端

松本蒸治様

この書簡からは当時、「亜行日記」は松本端が所有しており、松本家になかったため、端が筆写したものを荘一郎の息子である蒸治に送ったことがわかる。つまり現在、「松本荘一郎家資料」（仮）にある「亜行日記」三冊のうち一冊は少なくとも端が筆写したものと考えられる。また、先にも述べたとおり、荘一郎は明治三六年に亡くなっているが、松本家にとって「亜行日記」は荘一郎の遺著として大切に保管していく必要性があると端は考えたからこそ、この日記を写し取り松本家に送ったのであろう。

この日記の存在については、昭和一三年（一九三八）六月に刊行された目賀田種太郎の伝記『男爵目賀田種太郎』[7]に、渡航の際の様子の史料として「松本荘一郎氏の「亜行日記」と先生の自記」を

使用したことが記されており、「亜行日記」の存在は知られていたことがわかる。現在、「先生の自記」の所在が確認できないこともあり、目賀田の渡航の様子を伝える唯一の史料がこの「亜行日記」である。では次にその目賀田種太郎と松本荘一郎との関係について述べることとする。

3．松本荘一郎と目賀田種太郎

これまで何度か述べたが、今回、この日記を取り上げたのは、松本荘一郎が専修大学創立者の一人、目賀田種太郎と深い関係をもつためである。荘一郎と目賀田の出会いは、この日記にあるようにアメリカ留学の際であった。その後、明治一〇年（一八七七）四月に目賀田の妹・録子と荘一郎が結婚することによって二人は縁戚関係となり、その付き合いは生涯続くこととなる。荘一郎の葬儀にも目賀田は親族として参列している。

右から目賀田種太郎、同録子、松本荘一郎（明治８年）
大垣市立図書館所蔵

目賀田種太郎について簡単に記すと、目賀田は旗本・目賀田守文の長男として嘉永六年（一八五三）、本所太平町（現・墨田区）で生まれた。幼い頃から神童といわれるほどの俊才で、幕府の昌平坂学問所で漢学を、ついで同じく幕府の洋学研究機関・開成所で英語や数学を学ぶ。幕府滅亡後は徳川家とともに静岡に移住し、静岡学問所で英語を教えるなど、ここでも頭角を現した。

明治三年、文部省の国費留学第一期生として法律学を学ぶために荘一郎らとともにアメリカに旅立つ。明治七年（一八七四）にはハーバード大学卒業と同時に帰国するも、翌年には留学生を監督する立場で再渡米、引率の留学生には鳩山和夫がいた。この二回のアメリカ留学中に知り合った仲間たちと帰国後の明治一三年（一八八〇）に設立したのが専修学校（専修大学の前身）である。

目賀田は大蔵官僚、貴族院議員として様々な分野で活躍した。大蔵省主税局長、枢密顧問官などの要職を歴任。特に税制行政に手腕を発揮し、酒税法、煙草税法などの新設・改正に尽力したほか、条約改正などの外交問題にも携わり、韓国の財政顧問も務めている。

そのほか日本の音楽教育の土台つくりにも貢献。東京音楽学校（現・東京藝術大学）創立者であり、初代校長を務めた井沢修二とともに、日本の音楽唱歌を欧米の音楽と同化させようと研究も行っている。大正一五年（一九二六）、享年七三歳で死去した。

今述べたように、目賀田は明治三年と明治八年（一八七五）の二度にわたってアメリカに留学している。『男爵目賀田種太郎』には自記の存在があったことが記されているが、現在その所在が不明であることから、この時期の目賀田の様子を直接知ることができない。しかしながら二回目の留学の際の様子は、同行者である鳩山和夫

（現総理大臣・鳩山由紀夫の曽祖父にして、専修学校講師、東京専門学校（現・早稲田大学）校長なども務めた明治期の政治家）が残した「留学日記」[8]によりある程度は知ることができる。つまり、今回紹介した「亜行日記」と合わせることによって、目賀田の留学の様子を一端ではあるが、知ることができるのである。

■記にある船内の様子や、アメリカ到着後の荘一郎の行程は目賀田にとっても同様の経験であり、この日記から目賀田の当時の様子をうかがうことも可能であろう。初めて経験する海外での出来事は作者・荘一郎と同じように目賀田にとっても見るもの聞くものすべてが驚きの連続であったと思われる。

「亜行日記」に目賀田の名前が登場するのはわずか六回ではあるが、トロイに行く経緯などが記されており、目賀田の生涯を考えるうえでは大きな意味をもつ。特にこの当時、留学生たちが何を考えていたのか、また居住地や学校を選ぶ際に何を基準にして決定していたのか、またその助言はどのような立場の人が行っていたのかということをこの日記から知ることができるからである。

その意味においてもこの史料を紹介することは、この時期の目賀田の動向を知るうえで重要なことであると考えている。

【註】

1 朝倉治彦氏による監修で、ゆまに書房から一九八七年から八九年にかけて刊行された三六巻からなる資料集。
2 『朝日日本歴史人名事典』（朝日新聞社　一九九四）
3 『国史大辞典　第十三巻』（吉川弘文館　一九九二）
4 「松本荘一郎関係資料」（仮）所収（大垣市立図書館所蔵）
5 『大垣市制90周年記念大垣ルネサンス先賢展記念誌　先賢展本』（大垣市かがやきライフ推進部市民活動推進課　二〇〇九）
6 「松本荘一郎関係資料」（仮）所収（大垣市立図書館所蔵）
7 『男爵目賀田種太郎』（故目賀田男爵伝記編纂会　一九三八）
8 『鳩山の一生』（鳩山春子　一九二九）所収

【凡例】

翻刻に際しては、仮名づかいは清濁、振り仮名も含め、原則として原本の通りとした。ただし、次の点は改めている。

・翻刻に際して漢字は常用漢字を用い、変体仮名、合字は通行の字体に改めた。（例）「↓コト、ヰ→トキ、モ→トモ
・躍り字は原本どおりとし、漢字は「々」、平仮名は「ゝ」、片仮名は「ヽ」、二字以上は「〳〵」に統一した。
・適宜、句読点、並列点を補った。
・なお、史料中に、差別用語などの不適切な表現が含まれている場合があるが、歴史的な観点からそのまま掲載した。

明治三庚午歳

九月廿七日　晴、晡時ヨリ雨間至

八月四日、大学南校ニ於テ、合衆国へ為留学被差遣之旨被仰付タルヲ以テ、尓後諸事ノ装置ヲナシ、今廿七日朝、同校ニ於テ外務省海外旅行ノ免状并ニ洋行規則書一冊ヲ受取リ、日本橋南柏木亭ヨリ午後第四字諸友ト分袂、馬車ニ駕シ、第八字横浜ニ達シ、入船町高島屋ニ寓ス

此日、佐賀藩香月氏、余輩ト同命ヲ受ルト雖トモ、不快ノ為メ後ルヽヲ以テ送別セントテ、横浜ニ同行セラル

此夜、佐賀藩石橋氏ニ邂逅ス、亦藩命ニヨリ洋行セラルヘキ趣ヲキケリ

廿八日　陰翳

南校御雇教頭米人「フルヘッキ」氏添書アルヲ以テ、横浜八十九番英商「イトッワールド」氏ニ行キ、乗船ノ都合等諸事ヲ托ス、同人甚懇切ニシテ周旋最力ム、共ニ亜商四番乃チ太平海飛脚船社中ニ至リ、汽船及ヒ「サンフランシスコ」ヨリ「ニューヨルク」ヘノ汽車切手ヲ求ム

汽船上等切手　メキシコ銀　二百五十元

汽車中等切手　九十三元

外ニ正銀五十元バカリヲ懐ロニシテ、余ハ「ニューヨルク」迄ノ為替手形トシテ持参ス

廿九日　快晴

今朝第十字、小舟ニ乗リテ汽船ニ至ル、香月氏ト分袂ス、船名「チヤイナ」乃チ太平海飛脚船五艘ノ一ニシテ、船長三百六十尺（英国ヒート尺ニシテ吾一尺二寸バカリナラン）、装飾頗ル壮麗ヲ悉セリ、第十二字過キ抜錨ス、同船本国人如左

三條公世子当時英国御留学相成ルニ、随従セシ公子ノ伝ナリ

西京人	森寺弘三郎	徳山世子英国留学ニ随従スル人
徳山藩	大野直亮	右両人ハ当六月英国ヨリ帰国シ、再ヒ同国ヘ赴ク人ナリ
徳島藩	内藤類二郎	
同	黒部鉉太郎	

右両人ハ藩命ニ依テ欧州戦争事情探索ノ為ニ赴ク人ナリ

徳島藩	武谷福三	右四名ハ兼テ南校ニ同寓セルヲ以テ熟知スル人ニシテ、今度藩命ニ依テ留学ノ為英国ニ赴ク人ナリ
同	森甚五兵衛	
徳島藩	高良之助	
同	山田要吉	
静岡藩	飯塚十松	右両名ハ自分奮発ニテ「サンフランシスコ」留学ノ為赴ク人ナ
同	筧庄三郎	

リ

総州ノ人　横山錦柵

右ハ太平海飛脚船社中ニ雇ハレ「サンフランシスコ」ニ在留スル人

姫路藩　長谷川雉郎

静岡藩　目賀田種太郎

右両名ハ余カ同行人ナリ

惣計十四人

横浜ヲ去ル数里ニシテ船ヲ留メ午餐ヲ供ス、山海ノ珍味凡ソ五十品、尓後大抵如此、食畢リテ直チニ抜錨ス、此夜乗船切手ヲ以テ喫食席次ノ切手ニ替ヘ、乗客ヲシテ各其席次ニ就カシメ、晡時過キ晩餐ヲ供ス、其美午餐ニ踰ユ、此日始メテ腥膻純粋ノ飲食ニ転スルヲ以テ未ダ其美否ヲ弁別スルヲ得ス、唯試験ノ為メニ数十品ヲ嘗ムルノミ、尽日蓮岳依々晩看最奇

晦日　半晴半陰

早暁窓戸ヲ開キ看ルニ四顧渺茫水天一色半点ノ山影ヲ見ス、所謂太平洋ナリ、一昨日十二字ヨリ今十二字ニ至ル汽船行程并ニ船位如左

北緯　三十三度五十分

東経　百四十一度五十四分

距横浜　百六十八里　海里ハ乃チ吾十六丁バカリ

此日ヨリ余船暈ヲ病ム、乃チ船内ノ医ヲ招テ診ヲ乞ヒ、薬ヲ服スレトモ飲食頓ニ一新スルヲ以テ屢々嘔吐シ、頭痛岑々航海ノ苦、其快ニ勝ルコト亦数等、唯船房蓐裡ニ臥シテ一片ノ蒸餅一碗ノ茶ヲ喫スルノミ

十月朔　陰微雨間至ル

船暈如前日、船行船位ハ日々報知ノ為メニ会堂ノ階側ニ掲示スト雖トモ、別ニ関スルコトナキヲ以テ日々之ヲ記セス

二日　天気如前日

船暈少シク快ヲ覚フ、晩餐後甲板ヲ逍遥シ運動ヲナス

三日　朝陰第十字ヨリ雨間至ル

此日船暈大ニ癒ユ、始メテ定例ノ飲食ヲ喫スルヲ得タリ、尓後概ネ欠席スルコトナシ、唯時々朝眠ヲ貪リ、朝餐ノ期ニ後レ喫シ得サルコトアルノミ

船中喫餐ノ時限常例如左

朝餐　第八字半

午餐　第一字十二分前

晩餐　第五字半

喫茶　第八時半

右ハ大人ノミニテ小児ハ毎食一時宛ヲ早クス、食時ニハ船僮鑼を撾テ之ヲ報ス、若シ不快ノ時ハ船房付キノ船僮ヲシ

テ之ヲ吾船房ニ持チ来ラシム

船内乗組ノ人員并ニ船客如左

船長　一人　所謂カピテイン

第一等第二第三士官　各一人ツヽ

機関司長　一人

舵師　四人　所謂按針役

会計方　一人

医者　一人

此他水卒、僮僕、賄方二人、婢等

惣計百三十三人

水卒、僮僕ハ皆支那人ノミニテ、庖厨司長ノミ両人計リ黒奴ナリ、支那人皆此黒奴ニ頤使セラル、然レトモ皆猶本国ノ衣裳ヲ服シ、弁髪、髢頭、華客ト云フノ本色ヲ失ハス、之ヲ何トカ云ハンヤ

上等旅客　五十五人

下等旅客　西洋人　三十六人

支那人　八十三人

支那人ハ其不潔甚敷ヲ以テナルカ、縦令富豪ノ者ニテ十二分ノ金ヲ出スト雖トモ上等客ノ乗組ヲ許サス、飛脚船ノ通則ト云

惣計　船中ノ人員　三百七人

此夜喫茶会ヲ畢ル後甲板上ヲ逍遥スルニ、一片ノ新月天半ニ在テ、洋中ノ眺望頗ル悲壮ト可謂、旅案内中ニ所謂面白クモアリ又物スコクモアリトハ是等ノ事ナルヘシ、甲板上ノ会堂ニ入ルニ胡越対話ノミナラス、英、仏、亜蘭、イスパニー、イタリー、グリーキノ諸船客等団欒シテ誇ルアリ咲フアリ、喃呶ニ痴情ヲ吐ク者アリ、物理ヲ弁スル者概ネ皆英語ナリ、只恨余輩ノ了解シ得サルヲ、坐中又五六ノ婦人就中落後ノ花ト可謂者進ンテ胡琴（所謂英名ピアノ）ヲ弾シ、微妙ノ胡歌ヲ奏シ、曲終ル時坐客皆手ヲ拍テ喝采シ、互ニ其国ノ歌舞ヲス、ム、一仏人又一曲ヲ弄シ求メ、遂ニ余輩ニ至リ吾邦ノ歌ヲ奏セヨト云ヘリ、固辞乃チ止ム、又航海中ノ一適ナリ

四日　朗晴

洋面如洗水雲一碧俯仰鏡中ニ在ルカ如シ、船客皆消日ノ諸戯ヲナス、鞦韆ヲ弄スルノ児童アリ、椅ニ凴テ喫煙スル老人アリ、骨牌ヲ以テ輸贏ヲ争フ者アリ、奏楽独楽スル者アリ、又甲板上ニ三尺四方位ノ板ヲ置キ、板上ヲ九区ニ分チ、各其区中ニ数字ヲ書シテ、三四間ノ距離ヨリ数箇ノ鉄丸ヲ投スル者抔奇事ナシト雖トモ、亦怡目娯耳ニ乏シカラス

昨夜風静浪穏、新月潮ニ生シ最幽趣多シ、船客中横笛ヲ吹ク者アリ、頗ル羈情ヲ動セリ

五日　晴

風勢激烈、船ノ動揺高低ノ差ヒ三間余ニ至ル、船客苦ヲ呼フ者多シ、

余輩幸ニ之ヲ免ル

六日　陰翳逆風

此日日曜辰ナルヲ以テ、朝第十字船内乗組ノ耶蘇僧集会堂ニ出テ、経文ヲ講シ神歌ヲ奏ス、一婦人楽ヲ奏シテ之ヲ和ス、同船ノ船客皆来衆シ、坐起数回執礼甚勤メリ、如此スルコト凡二時間ナリ、連日風勢阻逆ナルヲ以テ舟行甚遅ク、昨十二字ヨリ今十二字ニ至ルノ間僅カニ海里百五十八里ヲ奔ル、船位如左

北緯　三十度廿分
東経　百六十一度廿分
距横浜　千百四十九里

此夕晩餐後第六字過ヨリ講経奏歌スルコト今朝ノ如シ

七日　尽日微雨、船行百七十里

八日　天気如昨

数日中大洋瀰漫渺茫ノ中ニ在リト雖トモ、時々白黒二鳥ノ数頭連飛浪ヲ掠メテ翺翔スルヲ見ル、西人ノ曰ク是レ鷹ノ一種ナリ、巣ヲ作ルニ所ナシト雖トモ能ク波間ニ宿スト

九日　微雨間至ル

今日午時ヨリ黄昏迄始メテ帆ヲ掛ルヲ得タリ、晡時風勢又変ス、此夜船客集会、各其西細亜州ニ在ル時ノ記行ヲ読ミ大聲談咲、時々日本ト云語ヲ聞ク、蓋シ誹議嘲哢ノ語多キナラン、唯馬耳東風共ニ其坐ニ在テ長髯黄髪ノ咲容ヲ見ル、亦一咲ヲ発スル耳

十日　晴、晩間大雷電、暴雨如注

十一日　晴、時有微雨

後十一日　尽日大風暴雨

此行日ニ逆フテ航海スルヲ以テ、今日経度百八十度（最高経度）ニ至ルヲ以テ一日ヲ閏ス、乃チ昨今両日共ニ西暦ノ木曜日トス、故ニ再ヒ十一日ヲ書ス、竹潭北條氏米行詩記中ニ一日ヲ閏スルヲ記セルハ乃チ是此事ナリ、此日風雨甚敷ヲ以テ舟行船位ヲ測ルコトヲ得ス、西人輓近発明ノ一器「シキスタント」ナル者ヲ以テ毎日十二字日光ニ依テ是ヲ測ルヲ以テナリ

十二日　晴

朝来微々順風アルヲ以テ午時ヨリ帆ヲ掛ルコトヲ得タリ

船行二日分共ニ船位如左

北緯　三十度八分
西経　百七十度十五分
船行　二百九十二里

距横浜　二千七十四里

十三日　朗晴、海波平穏

日曜辰ナルヲ以テ常例ノ講経奏歌アリ、飲食ノ美モ平日ヨリ数等ヲ加フ

十四日　晴、夜中雨

望　快晴晩間雲峰最奇観ナリ

数日中ハ航路ノ正半ニシテ大陸ヲ去ルコト共ニ二千里余、同行人皆航海ニ慣レテ又其苦ヲ覚ヘス、同夕甲板上喫茶堂ニ盍簪シテ、本邦ノ想像談ヲナシ謔咲縦横航海ノ快最懶惰ノ習ニ適スルヲ以テ、其苦ニ踰ユルコト幾等ナルヲ知ラス

夜間快月如盆、洋中清涼可愛、且偶蘇老後遊ノ夕ナルヲ以テ、森寺、長谷川、目賀田三氏ト洋酒ヲ甲板帆影ノ裏ニ酌ミ、吟賞三叟ニ至リ就寝、徒然ノ余船房掲示ノ規則ヲ訳シ左ニ録ス

第一条　毎夕第十一字灯火ヲ撤シ、諸事此期ヲ過ス可ラス、但病気中、船長或ハ医師ヨリ免許ヲ得タル者ハ此例ニ非ス

第二条　船房并ニ会堂ニ於テ喫煙スルコトヲ禁ス

第三条　猫犬及家禽等ヲ船房ニ入ルヲ許サス、若シ之ヲ携フルノ人ハ別ニ運賃ヲ払ヒ、船荷トナスヘシ

第四条　一切博奕ヲ厳禁ス、且撤灯後ハ骨牌遊モ之ヲ許サス

第五条　抜錨ノ後直チニ会食席次ノ切手ヲ船客ニ与フヘシ、船客宜シク其席次ヲ乱雑スルコトナカレ

第六条　船客中若シ酒氷ヲ求ムルモノハ宜シク食鈴ニ先タチテ之ヲ給仕人ニ命スヘシ、給仕人ハ会食中食机ヲ離ルヽコトヲ許サヽルヲ以テ、船客最モ此条ニ注意スヘシ

第七条　船客甲板ヲ逍遥スルノ間、輪房并ニ欄外ニ出ルヲ禁ス、且甲板士官ト談話スルヲ許サス

第八条　免許ヲ得スシテ猥リニ発銃スルヲ許サス

第九条　洋中ニ於テ万一風波或ハ其他ノ危難ニ逢フ時ハ、船長以下ノ諸司、船客ノ性命、諸物ヲ安全ニ保護スルノ責ニ任スヘシ、故ニ船客勉メテ騒擾雑沓スルコトナカレ、且騒擾ハ唯危難ヲ加フルヲ以テ最注意鎮定スヘシ

第十条　書庫中ノ書籍ヲ借覧セントスル者ハ宜シク之ヲ会計長官ニ告クヘシ

第十一条　毎朝第十一字一二ノ士官各房ヲ巡覧スヘシ

○士官并ニ水夫各其職ニ在テ勉強スルノ際、船客猥リニ之ニ雑糅シテ其職事ヲ妨クルハ固ヨリ厳禁スル所ト雖トモ、若シ危難ノ時ニ当リ船長ヨリ船客ニ其救援ヲ乞フノコトアラハ、宜シク容易ニ之ヲ諾シテ各適当ノ用ヲナスヘシ、如何トナレハ小船ヲ下タシテ覆没ヲ避クルノ間ニ至ラハ、船客亦自ラ其危難ヲ救フ者ナレバナリ

○航海中時々救火調練ノ為メニ号笛ヲ吹テ水卒ヲ集ムルコトアリ、

船客驚愕スルコトナカレ
○奴僕中若シ怠慢無礼ノコトアラハ速ニ之ヲ船長或ハ会計長官ニ告クベシ
以上
中等ハ即今之ヲ廃止セルヨシ、規則モ等級ニ由テ小異アリ、右ノ如ク規則書ヲ掲示スルト雖トモ、撤灯後甲板ニ出テ放吟スル者モ時ニナキニアラス、会食中不時ニ酒氷ヲ命スル者最多ク、博奕モ概ネ皆破規スルモノヽ如シ
○去ル朔日夜中暁第三字「サンフランシスコ」ヨリノ本舶「ジャパン」乃チ日本ノ義船名ナリト云ヘルニ洋中ニテ邂逅シ、互ニ小舟ヲ下シテ書状、新聞紙ヲ取替セリ、是常例ナリト云、航路ノ密ニシテ正ナル其一端ヲ証スルニ足レリ、忘却セシ故追記ス
既望　晴
夜間月光清絶如昨夕　船行位置如左
北緯　三十三度廿二分
西経　百六十度五十二分
船行一日間　二百十二里
旬七日　晴、晩間微雨
海波最平穏ニシテ水天一碧殆一円鏡ノ内ニ在ル思ヒヲナス、太平海ノ名実相副ト云フベシ
船行　二百廿六里
距横浜　三千三百九十六里
航海後気候ノ平和ヲ要シ、船位常ニ南ニ在ルヲ以テ頗ル温暖ナリシガ、昨今ハ漸次ニ北ニ偏スルヲ以テ少シク冷ヲ加フ
十八日　陰翳
船中氷ノ尽ルヲ以テ供シ得サルノ報アリ
北緯　三十四度四分
西経　百五十一度四十四分
船行　二百三十五里
十九日　晴
船行　二百三十里
廿日　晴
日曜辰西人礼ヲ修スルコト如前日
廿一日　陰雨
北緯　三十六度　気候大ニ寒ヲ加フ
西経　百三十七度零五分
行程　二百四十六里
今夜郷書数通ヲ作ル、「サンフランシスコ」港ヨリ差出スヘキ為ナリ

廿二日　朝陰、午後霽

廿三日　快晴

船中卵ノ尽ルヲ報ス

此夜晩餐後、一船客机頭ニ立テ酒盃ヲ挙ケ、船長ニ向テ弥久ノ航路無恙ハ全ク其労ニ依レルヲ謝シ、且其共ニ安全ナルヲ祝ス、衆客皆立テ手ヲ拍チ喝采ス、船長答フルニ同礼ヲ以テス、衆客亦酒盃ヲ挙ケ几頭ニ立テ号呼スルヤ、久シ、之ヲ常例ト云フ、此日船行位置如左

北緯　三十六度廿二分

西経　百三十二度十分

船行　二百五十一里（是ヲ航海中第一トス、順風ナル故ナリ）

距横浜　五千七十二里

距「サンフランシスコ」港　二百二十四里

廿四日　快晴

今朝早起、甲板上ニ登ルニ大霧濛々、暫クニシテ朝日三竿ノ外遙カ「カリホルニヤ」地方ノ連山迤逐タルヲ見ル、満舟ノ船客順風ナキヲ以テ常則ヨリハ日数多分ニカヽリタル、航海疲労後其喜ヒ実ニ可見ナリ、乃チ朝餐ヲ喫シ、諸物ヲ片付ケ再ヒ甲板ニ出テ東方ヲ注視ス、第十字前船両山相擁シテ其間一英里計リノ処ヲ過ク、乃チ「ゴールデンゲート」（義訳金門）ニシテ「サンフランシスコ」港ノ咽喉ナリ、船右ノ岬斗出スル所砲台アリ、数百門ノ大砲ヲ見ル、船左港内ノ小島二ヲ見ル、島上共ニ砲台ヲ設ク

此所ヲ過クレハ乃チ港ノ内海ニシテ細波瀲々、火船縦横ニ奔リ自ラ盛大ノ趣アリ

船右黄赭ノ山上数万ノ人戸ヲ見ル、乃チ港ノ商家ナリ、十一字船港ノ波戸場ニ至ル、祝砲二発旅愁ヲ破ル

船ノ港内ニ至ルトキ旅館ノ小厠既ニ飛舸ヲ泛ヘ、競テ旅客ヲ延カンガ為メニ本船ニ来ルノモノ数十人、波戸場ニ着スルトキ乃チ右ノ小厠ニ荷物ヲ托シ、馬車ニ駕シテ「オクシデンタルホテル」ト云旅店ニ至テ投宿ス

上陸ノトキ此地ニテ日本公士（コンシェル）トシテ、旧政府已来御雇ノ「ブルークス」氏出迎ヒ同車シテ旅店ニ赴ク、又御一新後政府ヨリ賜ハリシ委任状ヲ示セリ、旅店頗ル壮麗ニシテ七層ノ楼ヲ設ケタリ、楼ニ上下スルニ本朝所謂カラクリ仕掛ヲ以テシ、汽機関ヲ用ヒテ之ヲ上下セシム、名ケテ「イレウェートル」（物ヲ上ケルモノ、義）、又「ブルチカルレールロード」（縦テノ鉄道）ト云、喫餐ノ為メニ会食所ニ赴クニ数百人ノ客来集シテ真ニ盛大ヲ極メ、飲膳ノ豊美又驚クニ堪タリ、客房ノ数凡ソ四百余、晩間浴後「ブルークス」氏ト共ニ街路ヲ散歩シ要用物ヲ求ム、繁昌ハ実ニ西洋旅案内中ニ云ヘル所ノ如ク鉄道伝信機蛛網ノ如クニシテ、馬車ノ往来ハ櫛ノ歯ヲ引クニ似タリ、家屋ハ数層ノ高楼ノミニシテ気灯万点不夜城ト云ベシ、就中街頭ニ新聞紙ヲ売ルノ声耳ニ

聒シテ、電信機ノ便ヲ以テ昨西暦十六日（乃我廿三日）、英魯近来隙ヲ生シ、既ニ戒厳スルノ景況アルナド「ロンドン」ノコトマテ瞭然出版セリ、此夜佐倉ノ佐藤百太郎、徳島藩森源蔵、横浜人吉蔵ニ面晤ス、皆当時在港ノ人ナリ

廿五日　晴

早起朝餐ヲ喫シ、公士「ブルークス」氏ト共ニ、港内小嶋ノ砲台見物ノ為海岸ニ至リ小汽船ニ乗組ム、船中乗合ニ他ノ砲台ノ軍事総督有テ、細君二女ヲ携フルヲ以テ同行、本朝人ニ面晤対話セシム、小女齢二八ナレ𪜈頗ル博学ニシテ吾邦人民ノ多寡歳入ノ惣数、輸出入ノ金高抔ヲ問ヘリ、又能ク仏語独乙語ヲ話スルヨシ汗顔無比、砲台ニ達スレハ「ブルークス」氏、同港裁判所ノ免状ヲ受ケ呉タルヲ以テ、惣督并ニ次官一人誘導指点シテ砲台規則砲ノ大小等ヲ説諭セリ

台即今徒刑ノ罪人アリテ、土木ノ工未ダ全ク竣ラスト雖トモ規模斉整耳目ヲ一新スルニ足ル、大砲ナルモノハ砲門ノ径リ十五六インチ（インチハ吾一寸バカリ）其重サ或ハ一門四十噸ニ至ル、砲数ハ三百門ト云フ、台中至ル所砲丸ヲ積ミ重ネ実ニ驚クヘキ景況ナリ

砲台用フル所ノ花崗石ハ皆十七年前支那ヨリ運輸シ来ル者ニシテ、当時ハ未ダ合衆国内ニ之レアルヲ知ラサリシニ、近来之ヲ発見シ即今ハ勝テ用ヒ難キ程アリト云フ、是又其工ヲ費ヤスノ大ナルヲ見ルニ足レリ、次ニ輓近合衆国新発明ノ旋條大砲一発ヲ放チ、其砲丸海上三英里計リニ至リテ、破裂スルヲ見セシム、其費凡五十ドル計リナリト云（ブルークス氏ノ説ナリ）、此地港内ニ六砲台アリト聞ク、時既ニ遷レルヲ以テ行クヲ果サス

午時旅館ニ帰リ午餐ヲ喫シテ後、又「ブルークス」氏ニ誘ハレテ此地ノ「ウードワードガルデン」ト名ケタル博物園ニ至ル、草木禽獣魚虫ノ類ヨリ細ナルハ各国ノ紙幣等迄アラサル者ナシ、頗ル奇観ナリ、勝テ記ス可ラス

此夕筧、飯塚、横山三氏ト分袂ス、此夜河田栄之助君ニ逢フ、佐藤一斎先生ノ孫ナリ、聞ク当時在港本国人七人アリト

此地ハ開港後僅カニ廿年ニシテ無類ノ藪沢ト可謂故ナリヤ、中等以下ハ頗ル狡猾多クシテ、旅人ノ来ルヲ待チ、種々ノ欺策ヲ設ケ利ヲ射ルモノ多シト注意スヘキノ第一ナリ

港内気候吾八月頃ノ如クニシテ、且五月已前ヨリ雨ナキヨシ、樹木ノ色モ皆黄赭色ヲ帯ヒ、港ノ辺山ハ皆赭色ニシテ石炭ノ黒煙全港ニ漲リ、空気ハ清浄ナラサルヲ覚フ

今夜汽車中ノ諸都合ヲキヽ、上等切手ト横浜ニテ求ムル所ノ切手ヲ求メ替ユ　上等切手　百十九元

又汽車中寝床切手ヲ求ム、「オグデン」ニ至ル迄ノ分一人ニテ六ドル紙幣ナリ

亜米利加南北戦争以後、紙幣流通スルヲ以テ物価ノ騰貴最甚シク、且メキシコ洋銀合衆国洋銀当今ノ価如左、紙幣「グリーンベッキ」ト通称ス青背ノ義ニテ其紙背ノ青キヲ云ナリ

メキシコ洋銀百ドルニ付

合衆国金銀銭　百五六ドル　時有小差

合衆国紙幣　百十七ドル　余仝

通用小銭ハ「セント」ヲ限リト咎当百　銭ト同位ナリ、尤モ「シール」トテ最小銭名アリト雖トモ実物アルニ非ス、且「サンフランシスコ」抔ニテハ五「セント」以下ノ売買ハ殆ント之レナシト云、「カリホルニヤ」一部内ハ合衆国ノ版図ト云ナカラ右紙幣今以テ流通セス、尽ク金銀銭ノミナリ

廿六日　晴

今朝第七字旅店ヲ発シテ馬車ニ駕シテ波戸場ニ至リ、汽船ニ乗リ凡四英里程内海上ヲ渡リ「オヽグランド」ニ至リ、直チニ汽車ニ乗リテ発ス、第八字ナリ

汽車ハ粧飾美麗便利実ニ可驚者ニシテ、大小便所モ車中ニ備リ、車中ハ温室（ストーブ）ヲ設クルヲ以テ温和不知寒、当時汽車中世界ニ冠タル者ト云フ鉄道ノ尤長キ第一ナルヲ以テナリ、公士「ブルークス」氏送リテ五十英里バカリノ駅ニ至リテ分袂ス

此日午餐ハ廿五分時ニ与ヘ、晩餐ハ卅分時ニ与ヘタリ、共ニ銀銭七十五セントナリ

通路小山迂曲ノ中及ヒ平原ヲ過ク、汽車ノ迅速ハ竹潭北條氏ノ句ニ路傍草樹難認得悦訝奔流漲碧波ト云ノ虚ナラサルヲ知ル、大抵西洋一時間廿五六英里、夜間ハ寝床ニ臥ス、安全家ニ在ルガ如シ、唯動揺可厭ノミ

廿七日　快晴

今朝　リ紙幣流通ス、毎食一ドル、終日火車奔過一ノ記スヘキナシ、過クル所概ネ曠野ノミ

此日始テ亜米利加土人（所謂インヂヤン銅色人種）ヲ見ル、被髪肩ヲ過キ、洋人ノ古衣ラシキ者ヲ身ニ纏ヒ、各フランケットヲ被ムリ、汽車小憩ノ間車窓下ニ来リ飲食貨財ヲ乞フ、嬰児ヲ急縛シ脊負フ者アリ、赤粉ヲ両頬ニ塗抹シ修飾スル者アリ、蛮野ノ醜態ヲ極ルト可謂、且山野中土ヲ鑿ツテ穴居スルモノアリ、木片ヲ重ネ其上ニ置キ室ヲ構フル者アリ、又人ニシテ非人ノ態ヲナセリ、晡時山中ヲ過ク、積雪班然一杯ヲ掬シテ食ス

廿八日　快晴

今朝第六字「オグデン」ニ達シ車ヲ転ス、寝床代一人ニ付八ドルナリ、「オグデン」ヲ発スル後峰密迂廻ノ中ヲ過ク、山水暎発頗ル険阻ノ地ナリ、名ケテ「ジビングゲート」（直訳鬼門）ト云フ、其十二英里間険極ルヲ以テ也、其余通路ノ景況略昨日ニ同シ、唯車右ノ遠山皆雪ヲ帯ヒ風光可喜、且途上処々ニ陣営アリ、兵士皆銃ヲ取テ之ヲ守ル、土蕃防御ノ為ナリトテ政府ヨリ出ス所殆ンド三大隊ニ至ルト云、土人ヲ見ルコト昨日ニ倍ス、又一人ノ小斧（トマホーク）ヲ携ヘ状貌猛悪米国歴史ノ画ニ類スルヲ見ル

廿九日　陰翳微雪時至車前寒気如砭

「カリホルニヤ」ヨリ以東地勢漸次ニ高クシテ、今日過クル所ハ有名ナル「ロッキー」山々脉々　テ海面ヨリ八千二百余「ヒート」ト云フ、途中第之高処　ナリ、此処又地道アリ、途中第一ノ長地道ト云フ

右高処ハ風光頗ル佳ナリト雖トモ、雪片車ノ車窓ニ粘シテ眺望ヲ妨ケタルヲ以テ車外ニ出テシニ、風力強烈ニシテ「サンフランシスコ」ニテ求メシ帽子ヲ吹飛セリ、余先キニ船路ニ在テ太平海ノ月ヲ賞シ、本邦ヨリ齎ス所ノ帽子一ヲ失ヘリ、此ニ至リテ過チヲ二度ス、古人脱帽ノ風流ニ非ス、迂拙唯自咲スルノミ、○此日土人ヲ見ルコト大ニ減ス

閏十月朔　陰翳

今日午後第二字「オマハ」ニ達ス之ヲ鉄道ノ半途トス、以東ハ大ニ以西ト景況ヲ異ニシ、開化ノ浹洽スルノ域トス、汽車代百十九ドルノ内「オマハ」以東ハ僅カニ四十三ドル四十五セントナリ、「オマハ」ヨリ以東ハ鉄道三路ニ分ル、ヲ以テナリト云、寝床代一人ニ付三ドル、第四字同所ヲ発シ「ミッソリー」河ニ至ル、汽渡船アリ、船中楽ヲ奏スルノ乞児アリ、旅客ノ履ヲミガキテ数銭ヲ乞フノ貧童アリ、尓後至ル所概ネ之ヲ見ル、川ヲ踰ヘテ汽車ヲ転シ発ス

此日晩餐ハ「ダイニングカル」トテ飲食ヲ備ヘタル車客車ノ後ニ在テ、衆客ヲシテ皆此車ニ就キ一瞬百里中喫餐セシム、便利最極ムト可謂、然レトモ如何ナルヤ行中唯此一回ノミ

二日　晴

今朝第十字過キ「ボリングトン」ニ達シ、有名ナル「ミシッシッピー」河ヲ踰ユ、河二千二百尺ノ鉄橋ヲ架セリ、午後第四字「チカゴ」府ニ達ス、府人口三十万、「ミチガン」湖ノ口ニ在リ、頗ル繁華ノ地ニシテ合衆国都市中盛大ナルモノ、一ナリ、且鉄道四方ヨリ輻湊シ、其駅逓ノ大ナル殆ンド世界第一ト云、駅道ノ雑沓尤モ甚敷シテ余ノ荷物ナド毀損セラレ、不得已自ラ車中ニ携ヘタリ

荷物ハ元ヨリ「チェッキ」ト云者ヲ付、其合符ヲ持主ニ渡シ、常ニ旅人車トハ別ナレトモ、此駅ニテ荷数点検ノコトアリ、右ノ合符ヲ差出シ其数ヲ点照セシムルナリ、荷物ハ十二分ニ堅固ナラサルベカラス

三日　晴

暁起車窓ヨリ見レハ四望ノ積雪銀世界ヲ過クルノ思ヲナセリ、午時「オハイヲ」河辺ヲ過キ「ピッブルグ」ニ至リテ午餐ヲ喫ス、相応ノ都邑ニテ殊ニ盛大ノ製鉄所数十所アリ、晩間一駅（駅名ヲ忘却ス）ニ至テ雨驟カニ至レリ、匆々汽車ヲ転シ、且晩餐ヲ喫ス

寝床ハ別ニ之ヲ求メス「チカゴ」ニテ求ムル切手ニテヨキ由ナリ、「サンフランシスコ」ヨリ「ニューヨルク」ニ至ル総計廿二ドル

此日連山ノ内ヲ過ク、数所ノ地道アリ、「チカゴ」ヨリ以東ハ数日前過クル所ト大ニ面目ヲ殊ニシ、実ニ鶏犬相聴ヘ桑麻相望ムノ勢ニテ開墾殖ント隙地ナシ、然レトモ従来北部ハ牧畜人工ノ輸出ヲ主トスルヲ以テ、山間モ多ク牧場ニシテ田畦ハ大抵蜀花黍ノ枯茎ヲ見ルノミ

此夜暁第三字「フェンデルフィヤ」ヲ過クト云

四日　晴

朝第六字「ニューヨルク」府ニ達ス、「ハドソン」河ヲ渡リテ馬車ニ駕シ、第八字「メト占　ポリタン」ホテルニ投宿ス

午後第二字「モントリオル」ト云ル両替屋ニ至リ、手形ヲ引替紙幣ヲ受取リ帰ル、大埜、高、内藤君同行、此夜在留ノ本邦人ニ邂逅ヲ欲スレトモ未タ其便ヲ得ス

今日余他行中、当府ノ新聞紙屋「ヘラルド」ナル者来訪、森寺ヲ「プリンス　諸侯ノ如キ位爵ナリトシ、及ヒ他ノ十人ノ文官到着トノ妄伝ヲ糺サンタメ　ニ来リシニ、長谷川、森寺氏等応接シテ帰セリ、此後七八名ノ新聞紙家逐々来訪種々ノ事ヲ問ヘリ、且余輩ノ今朝此府ニ着シ「ハドソン」河ヲ過ル時、汽車中ノ一米人能ク余輩等ノ来ルヘキコト、六人ハ英ニ赴ク等ヲ熟知セリ、電信機ヨリ新聞紙ニ出版セシヲ以テナリ

「サンフランシスコ」ヨリ此府ニ至ル三千四百余英里ナリ

五日　晴

今日日曜辰ナルヲ以テ不得已退居セシニ、午時過キ本邦人ナリトテ来訪スル者アリ、乃チ之ヲ余ノ室中ニ迎レバ、乃チ花頂宮様ニテ御留学中ハ東隆彦公ト申上ル旨ニテ、随従柳本、藤森君ナリ、今朝出版ノ新聞紙ニテ日本人ノ「メトロポリタン」ホテルニ止宿セルヲ聞キ御来訪ノ由ナリ、文明一盛微ト云ヘシ、暫クシテ高戸、五十川（イカ）ノ両君亦来レリ、乃チ共ニ晩餐ヲ喫シ、晩間森寺氏ト共ニ数町ヲ拝送シテ街頭ヲ逍遥ス

（六日　晴）

今朝一書ヲ認メ服部、折田二君ニ差出ス、二君ハ岩倉殿公子随従ノ人ニシテ　、余発程ノ前殿ヨリ公子方ヘノ鋪シ　物御伝言等アリシ故ナリ

旅店盛ンニ過キ多費ナルヲ以テ英行諸人并ニ高、山田両氏ニ別ヲ告ゲ、「ニューヨルク」府東「ブルークリン」　ノ「ピンポントハウス」ト云小旅店ニ転寓ス、乃チ花頂宮様御寓所ニテ柳本藤森　二君モ亦同寓ナリ、旅店ハ「ニューヨルク」「サンフランシスコ」共ニ一昼夜四ドル半、或ハ五ドル、　其他物価ノ高貴甚シキ、其一ヲ　左ニ録ス

「ニューヨルク」ニテ衣服一襲尋常ノ者七十五ドル位　朋友間感冒セシモノアリテ旅店中医ヲ招キ診ヲ請フニ、僅カニ左右ノ内一手ヲ握リ一二ノ容体ヲ聞ノミニテ、二三診ニ付各廿ドルノ謝礼金ヲ要セ

リ、勿論薬ハ別ニ薬舗ニテ求ムル也

七日　晴

今朝柳本氏ト莊姑　メテ「フェル」氏ニ行キ、「フルベッキ」氏ノ添書ヲ致シ、且諸事ヲ托ス

今午後服部君来訪セラル、岩倉殿御托シノ諸物ヲ渡ス

八日　晴

今晡時薩藩湯地氏来訪セラル、今般来着ノ内同藩前田氏アランカトテナリ

此頃新聞紙ヲ閲スルニ普仏戦争同前ニテ昨日抔カ又々仏兵大敗ヲ取リ、「パリー」城内モ兵粮ノ尽ル　ニ至ラントス、若シ然ラバ必ス降ルヘシ、魯英ノ隙ハ殆ンド解ケテ兵ヲ挙クルニ至ラズナド出版セリ

九日　晴

今朝第十一字長谷川、目賀田両氏ト共ニ「フェルス」氏ヲ訪ヒ、都府近傍ハ浮花ノ風習流行スルヨリ入費モ従テ多分ナレバ、先「ツローイ」府ニ留学スヘキヲ決答ス、帰路高、山田両氏ノ寓ヲ訪ヒ、且教師「ラーシー」氏ニ面晤ス

十日　晴

今朝高戸、五十川来訪セラレ、「ブルークリン」中ニ諸画集メ　輓近画術ノ進歩ヲ示ス為メニ縦覧セシムル者アリトノ　噂アリ、乃チ花頂宮様始メ一同行テ之ヲ見ル、大小諸画山水人物草木等皆金縁ノ額ニシテ、貴キ者ハ其価皆五六百金ニ至ルト云、其数モ亦数百皆真致ヲ極メ、就中夜景気灯ノ画抔ハ其妙殆ンド名状ス可ラス

今日午後高、山田両氏来訪セラル、「プリンス」　或ハ「ラウレンス」ニ留学セラル　キ由ナリ

今日服部氏ヨリ「テレグラーフ」　ニテ余ニ何ノ地ニ留学スルニ決センヤ、何日頃来訪スヘキヤヲ訪ヒ来ル

今朝目賀田、長谷川両氏ト写真セシム

十一日　晴

今午時前高木三郎君来訪セラレ、乃チ長谷川、目賀田両人ト同氏ニ誘ハレテ「フェルス」氏ニ至リ「ツロイ」府ノ首尾ヲ聞キ、夫ヨリ「セントラルパーク」博物遊苑ナリニ至ル、苑内馬車アリテ皆之ニ駕シテ苑中ヲ遊覧スルナリ、所謂文王ノ囿方百里ナルモノニシテ、「サンフランシスコ」博物苑ノ如ク木戸銭ノ如キヲ歛メス、生憎普請中博物ノ所ハ全ク見ヲ　得スト雖トモ、珍禽奇獣ハ頗ル多ク、且囿裏山水ノ妙天工ニ加フルニ人工ヲ以テシ、清潔無纎塵、且水ヲ撒シ途ヲ　ラカニスルノ馬車、林ヲ清メ落葉ヲ払フノ園丁、非常ヲ防クノ兵士等万事備具実ニ富饒ノ一端ヲ見ルニ足ル、遊客ハ本ノマヽ、沢可ポリス也鑑ノ事　リ、各富豪ニ誇リ美麗ヲ競ヒ東奔西走其轂相撃ニ至レリ

囿裏ノ道紆曲シテ殆ンド十英里ナリト云、囿ノ右側ニ大池アリ、「ニューヨルク」府中用ユル所ノ水ヲ貯フル者ト云フ、帰路長、目両氏ニ別レテ高木氏ト共ニ「ハドソン」河ヲ踰ヘ汽車ニ駕シテ、夕方七字過キ「ニューブロンスウイーキ」ニ至ル、岩倉殿世子旭公ヲ訪ヒ談、第十二字ニ至ル、乃チ一旅店ニ就テ宿ス

十二日　晴

今朝高木君来訪セラレ、乃チ共ニ龍公氏ノ寓ニ至リ拝謁ス、且南部公氏ニ拝晤ス、談中折田、山本ノ両氏亦来レリ、午時頃折田氏ト共ニ勝氏ノ寓ヲ訪ヒ、小鹿君并ニ杉浦君ニ面晤シ、且午餐ヲ喫シ、第四字諸君ト分袂、汽車ニ駕シテ夕方第六字頃「ブルークリン」ニ帰ル

勝氏寓ニテ杉浦君ヨリ所聞、当時当国留学ノ本邦人如左

花頂宮御事　「ブルークリン留学　東隆彦公
「ニューブロンスウイーキ」留学
岩倉新侍従公事　旭小太郎世子
岩倉八千丸公事　仝上　龍小次郎公子
森岡前知事公御舎弟　仝上　南部英麿公子
佐土原世子　ボストン　島津又之進世子
同御舎弟　ニューヘーブン　丸岡武郎公子
同　仝上　町田啓三郎公子
静岡房州公子息　ニューブロンスウイーキ　勝小鹿
鹿児島藩　同上　杉浦弘蔵
同　シルストン　折田彦一
同　ボストン　吉田彦麿
同　ニューヘーブン　湯地治右衛門
同　アイダサカ　長沢鼎
同　合衆国海軍学校　松村淳蔵
同　ブルークリン　野村一介
同　当国留学ノ本邦人取締ノ命ヲ奉スル人也　ミッドルトウン　永井五百助
同　ニューヘーブン　大原令之助
佐土原藩　ボストン　平山太郎
同　ニューヘーブン　橋口宗儀
同　同上　児玉章吉
熊本藩　ボストン　林源助
同　同上　津田亀太郎
同　横井平四郎息也、次男ハ不快ニテ帰国セリト云　合衆国海軍学校　伊勢佐太郎
仙台藩　モルストン　富田鉄之助
山口藩　ニューブロンスウイーキ　服部一蔵
同　同上　山本重輔
盛岡藩　同上　奈良真志（マサシ）
筑前　（此両人ハ幼年ナカラ学業ハ頗ル進歩セリトト云フ）　ボストン　井上六三郎
同　同上　本間英一郎
久留米藩　山田何某

岡山藩　ニューブロヌ　ウイーキ　土倉正彦
長岡藩　同上　白峰駿馬
菊間藩　フルデルヒヤ　手嶋誠一
福山藩　ブルークリン　高戸賞士
同　同上　五十川基（イカ）
同上　柳本直太郎
同上　藤森主一郎
徳島藩　（此二人ハ余輩　高良之助
同　同行ノ人　山田要吉

右之外脱走ノ姿ニテ「ミチガン」抔ニモ留学セル本邦人アリト英国抔ハ又更ニ多キ様ニ聞ケリ、英国人ナドノ日本ヨリ盛ンニ留学生ノ出ルヲ驚ケルモ亦宜ナリト云フベシ

先キニ福井藩日下部太郎ト云ヘル人天資鋭敏、加フルニ勉強ヲ以テシ、学業頗ル不群ナリシニ不幸ニシテ労症ニ罹リテ死凶ス、「ニューブロンスウイーキ」ニ葬レリ　勝氏ノ寓ニテ新墳ノ写真ヲ一見セリ、可惜

十三日　陰翳

今午前長谷川、目賀田両氏ト「フェルス」氏ニ至リ、「ツローイ」ヘノ添書ヲ持帰ラル、○明日「ツローイ」府へ赴クヘキヲ以テ今晩間高戸氏ヲ訪ヒ別ヲ告ク、宮様柳本同行ナリ

十四日　陰翳

今朝第八字「ピンポント」ヲ発シ馬車ニ駕シテ「ニューヨルク」府内ノ駅逓ニ至リ、第十字迄事ニ　テ同府ヲ発ス、過路「ハドソン」河ニ沿フ両岸ノ奇石怪岩畳々紛出、且小山紆曲其風光本邦発程後見ル所ノ第一トスヘシ、晩第五字「ツローイ」府達　ス、此間百五十五英里ナリ、「ニュートンウイルソン」氏駅所ニ出迎セラル、第三坊百四番ノ寓居ニ至ル、「ウイルソン」氏ハ「フェル」氏ノ添書致シクレタル人ニシテ、此府中学校（アカデミー）ノ教頭ナリ

十五日　陰

今朝「ウイルソン」氏ノ子「フレッド」余輩ヲ誘テ街頭ヲ逍遥シ、必用ノ諸物ヲ求メシム

午後「ウイルソン」氏ヲ尋ネ、学校ニ至リ日課ヲ定ム

日課　朝第八九字ノ間一時間　読書
午後第二字ヨリ三字迄　数学、語学
夜間第七時ヨリ一時間定課ニ非ス　読書

「ウヰルソン」氏ノ懇切余輩ヲ待ツコト子ノ如ク大ニ安堵ノ思ヲナセリ、当府ノ人■五万余ニシテ「ウェストツローイ」ト一河ヲ隔ツルノミ、頗ル繁華ニシテ「ニューヨルク」「ボストン」府等ヘ日々数回汽車往来シ、便利一ノ欽典ナク、人物総テ質朴ニシテ　都下浮華ノ景況ナク大ニ留学ノ都合ニ可ナラント思ハル、「ニューヨルク」府ノ繁華抔ハ固ヨリ、世界中有名ノ地故

論スルヲ待タスト雖トモ、実ニ至ル処諸事ノ便利ヲ尽シ、人工殆ンド天工ヲ奪フノ景況ハ文明開化ノ盛微其端ヲ見ルヘキ者ニシテ、人民ノ勉強教育本末ヲ得ルノ二ツハ最可驚ナリ、乞児モ往々街頭ニ於テ之ヲ見ルト雖トモ、固ヨリ数百万人口ノ「ニューヨルク」府中ニ指ヲ屈スヘキ程ニシテ、当国々法既ニ盲聾孤病貧ノ諸院具備スル上、殊ニ人民自主自由ノ権ヲ得ルコト世界ニ冠タルノ国内ニ乞丐ヲナス者ハ到底怠惰ニ出ル事故、之ニ加フルニ宋衰ノ仁ヲ以テスルモノ亦罪アリトスト

寓居ハ「ボールデングハウス」トテ賄屋ニテ、諸事家内同様ニ世話イタシクレ、実ニ四海兄弟ノ景況ナリ

尓後記スヘキコトナシ

廿日　晴

明日ヨリ余ハ第七街二十四番ノ賄屋ニ転寓スヘキニ決セリ

此夜定課ノ読書ヲ畢ル後、此日記ヲ認メ畢ルヲ得タリ、時ニ夜既ニ第十字ニ至リ、寝ニ就クノ定期ナリ

北亜米利加合衆国ニューヨルク州内
東ツローイ府第三坊百四番ニ於テ
気灯下ニ誌ス

大日本　　巨鹿城　　松本荘一郎